新 年 の ご 挨 拶

武 田 喜 三*

会員の皆様，あけましておめでとうございます．

'80 年代の幕明けに当たる昨年は，まさに激動の名にふさわしい世界情勢の変化に遭遇いたしましたが，ここに当協会創立第 66 周年の新春を迎えました．過去 65 年の間，日本鉄鋼協会は活発な活動を展開し，着実に実績を積み重ねてまいりましたのも一重に幾多の諸先輩ならびに本会会員諸兄の一方ならぬご尽力の賜と深く感謝する次第であります．

ご承知のように，最近 20 年間における日本の鉄鋼産業ならびに鉄鋼製造技術の進歩発展はめざましいものがありました．日本鉄鋼協会の足跡は如実にその歴史を物語つております．

本協会の主要な事業の一つである講演大会が昨年秋，記念すべき第 100 回大会として，近代製鉄所発祥の地である北九州地区において極めて盛大に催されましたことは，鉄鋼製造に携わる私共一同にとりまして等しく善びとするところであります．

省みますに，本協会が創立 10 周年を迎えた大正 14 年 10 月に，第 1 回講演大会が開催されて以来，第 2 次世界大戦を始めとする幾多の障害を乗り越え 56 年にしてこの輝かしい金字塔を樹立することができました．

ここに至るまでの諸先輩の並々ならぬご努力に対し，改めて敬意を表する次第であります．

第 100 回大会におきまして発表された論文は，実に 750 件を越え第 1 回大会の 14 件に比べ，量的に隔世の感があるだけでなく，その内容が極めて高度にかつ広範囲にわたつておりますことは，他業界のみならず国際的にも高く評価されているところであります．

本協会の講演大会が今後とも鉄鋼に関する研究ならびに技術の相互啓発の場として活発に運営され，鉄鋼業の発展に一層の貢献を果たすものと確信しております．

また，企業の技術研究の交流の場である共同研究会はますますその活動の輪を広げ，18 部会の構成により鉄鋼製造技術全般にわたりそれぞれの専門分野の研究者，技術者が最新の成果について発表討議を行いまた貴重な情報活動の場として活用されております．とくに若い世代の現場技術に携わつている方々にとつては，研鑽の場として，製造技術革新の温床にもなつております．

その他，当協会の事業活動はますますその範囲を広げ，日本金属学会・日本学術振興会と本会の三者による鉄鋼基礎共同研究会は産学共同の実を果たしております．また標準化委員会は鉄鋼関連 JIS 原案・協会規格案の作成など地道な業務に取り組んでおりますが，とくに国際的標準である ISO に関し TC17 (鉄鋼関連) の幹事国として活動を行うと共に下部機関である SC1 (分析) の業務も開始しました．

機関誌「鉄と鋼」ならびに「Trans. ISIJ」の発行も年々に内容が充実され，国内外の評価もますます高まつております．更には，鉄鋼技術情報センターによる技術情報サービス活動も遂年成果を挙げております．

以上，日本鉄鋼協会が取り組んでいる事業についてその一端をご紹介いたしましたが，今年も基本的にはこれまでの方針に準じて運営して行く所存であります．

* 本会会長　大同特殊鋼(株)取締役社長　工博

さて，日本の鉄鋼産業ならびに鉄鋼製造技術の進展は国際的な地位を高め，必然的に諸外国との交流を要望されると共に，我が国の指導性を強く期待されるようになりました．

昨年，当協会が参画いたしました国際会議は，日本-ベネズエラシンポジウム(5月)，日本-オーストラリアシンポジウム(7月)，圧延に関する国際会議(9月)，第4回日独セミナー(11月)と続きましたが，いずれも効果的にかつ盛況裏に開催することができました．

本年も，薄鋼板成形に関する国際シンポジウム(5月)，第3回日本-スウェーデンシンポジウム(5月)，第8回日ソシンポジウム(6月)，第6回材料集合組織国際会議(9月)，第1回日本-中国シンポジウム(9月)，第3回日本-チェコシンポジウム(11月)と重要な国際会議が予定され，国際交流活動はますます広がつて行くものと思われます．

今日，日本の鉄鋼業は国際的に優位に立つていますが，世界の政治経済の情勢のめまぐるしい変化は，日本にいかなる形で影響をもたらすか全く予断を許しません．しかしながら，戦後の荒廃の中から立ち上がり，また幾度か襲いかかつた資源，エネルギ問題の変化を克服した叡知と努力をもつてすれば，日本の鉄鋼業の繁栄は期待し得るものと確信しております．

学術と技術の調和融合による日本の鉄鋼業発展のため，会員の皆様の一層のご健勝と当協会のますますの活動を祈念いたしまして新年のご挨拶といたします．